

夢物語 卷の式

P 6 7

夢物語卷ノ二目録

- 一、地改被仰渡花里村御繩初之事
- 一、御役人方村々地所内糺之事
- 一、宮村内改并冥加銭の事
- 一、松木村寄合之事
- 一、諸勸進断之事
- 一、新町川原寄合之事
- 一、御添簡願并大垣行之事

P 6 8

- 一、妹尾順兵衛江戸発足之事
- 一、百姓大垣出訴之事
- 一、大垣方飛州へ飛脚并江戸表御届ケ之事
- 一、願ニ不加村々之事
- 一、古川收納組ニ而願不加名主之事
- 一、御奉行所方御刺紙至来之事
- 一、御召之者共発足之事
- 一、江戸表方被仰渡之事

P 6 9

地改被仰渡并花里村御繩初之事

安永二巳ノ二月国中名主組頭 御役所へ被召出御定免切替ニ付少々加免被仰付同被仰渡之趣ハ当国之儀御檢地以後八拾余ケ年御手入も無之新田或者切添立出畑田成等之地茂可有之ニ付今度御勘定所方御地改被仰付近々御役人様御越被成候間村々田畑地引絵図小前帳認差上御改ヲ可請段被仰渡ける郡中名主共一同奉畏御請印相濟村々へ帰り御差図之通り地引絵図小前帳認尔

P 7 0

掛りける同三月十一日地改御奉行御勘定方水谷祖右衛門殿同瀧又右衛門殿御普請方内藤浅次郎殿今井勘助殿高山町御着宿有り同十八日灘郷花里村御繩初メなり近在村々之者共も罷出て御地改之躰を見けるに田畑の四角に境見を立同四はうに梵天を立ル是方十文字に繩をはり繩の違目の所に大工かねを当てひすみを直シ竿取の役人間数ヲ改て帳面に記ス如斯一繩毎御改也此躰を見ける百姓共かかる微細の御改にて尺寸の所迄余歩になりてハ

P 7 1

行末百姓立行かたしと郡中一同に申合けり

御役人方村々地所内糺之事

閏三月中旬御手代地役人方郷村御廻り地所内糺有之趣にて三枝郷より川上郷へ御廻村の人々にハ御手代妹尾順兵衛地役人古田驒四郎山田喜左衛門三枝郷下切村始にて名主善三郎方に数日御逗留あり扱当村も花里村同様微細に御繩被入其上惣百姓呼出し被仰聞けるハ此度当村地所内検致し試ルに甚地広也繩毎に

P 7 2

式割三割、中にハ五割に及ふも有なり、江戸御役人方の改を請候ハ、格別御高も増、其上多分費へも懸リ可レ申、今度大積りを以、村高に三割増位、先達而願出候ハ、村方勝手筋にもなるへし、頭方得心ならハ、宜しく申立呉へしと被二仰聞一ける、百姓共も三割増杯とハ思ひも寄らぬ事也、殊に最初にて外村の様子も知れされハ、暫ク御延引可レ被<sub>レ</sub>下と断りけれども、立テ御理解有<sub>レ</sub>之故、渋々に御請を申しける也、それより中切村江

P 7 3

御移り有り、下切村同様地所御改之上、割増之趣被二仰聞一けれ共、兼而村中示合置けれハ、御延引被<sub>レ</sub>下<sub>度段</sub>、相断ける、都而上切村・赤保木村・川上郷内御廻村有<sub>レ</sub>之けれ共、頭方不承知の趣なれハ、割増の事も不<sub>レ</sub>被二仰出<sub>一</sub>そこそこにして御帰りなり、大八賀郷より小八賀郷へハ御手代大山弥助、地役人足立忠次右衛門、吉村助右衛門也、大八賀郷松本村始メ同村改済、直二三福寺村へ御越し七蔵宅へ入たまひけるに、当村兼而示合せ居けれハ、百姓大勢集り中にも百姓七蔵、半兵衛等口ヲ揃へ

P 7 4

申上けるハ今度地所御内改之儀、奉<sub>二</sub>承知<sub>一</sub>候得共、此節植付前にて、百姓共甚事多ク日をかすえて働ク時節二候得者、御案内等も難<sub>レ</sub>仕、仍而唯今御内改之儀ハ御延引可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>追而御奉行様御改之節逐一御案内仕可<sub>レ</sub>申候、猶又御宿之儀者得<sub>不</sub>レ<sub>仕</sub>と憚なく申上けれハ、御役人方も慮外なる申方と思シけれとも其俣にして名主方へ御越あり、一同呼出シ数々に御理解仰聞られけれ共重立ける者共得心不<sub>レ</sub>致、夫より居合の軽キ者に案内為<sub>レ</sub>致そこそこに改て、松木村漆垣

P 7 5

内村へ入たまふ、何れの村々もふしやうふしやうの案内にて内改メ  
済ける也、今度、七蔵・半兵衛存寄の次第を遠慮なく御役人  
方へ申上げる故、一旦ハ諸人ほめけれとも後の難儀とハ成行ける

宮村内改并冥加銭之事

御手代青木儀兵衛、地役人田宮祐七・市村又五郎、右ハ久々野郷

御廻村宮村始メ也、当村も不得心の振合なれ共、強テ案

内為レ致、御繩入有レ之、其上村役人并惣百姓呼出し、被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>  
けるハ当村至テ繩延て相見ゆる也、然ハ微細に改を

P 7 6

請なハ、何程の高増に可<sub>レ</sub>成哉、難<sub>レ</sub>計、兎角此方より

先達而願出ハ、少々の高増にても済へし、其儀ならば供ニ申立

とらすへし、全体当国の義、検地以来新開切添の改もなく

余歩の所数ケ年作取にいたせしハ御料所だけ也、私領

なれハ是迄の宥免有間敷也、新田切添等是迄無年貢

にて作り来れる冥加のためと存、古田高拾石ニ付永百文ツ、  
増永上納可<sub>レ</sub>致と被<sub>レ</sub>仰けれハ、百姓共申けるハ神か仏の事

ならハ冥加銭と云事も可<sub>レ</sub>有レ之、新田切添等之分に御年

P 7 7

貢を増、其上古田畑高に冥加永差出シ候義、得御請仕

まじ、左様被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候御役人様御家名承置たし<sub>など</sub>抔と、種々

過言を申懸ケ狼藉をも働クへき様子なれハ、御役人中も

其俣に差置て次の村々へ廻られける、郡中百姓共、ケ様の事  
どもにつき益々疑心を起シ、色々悪評を云ひろめ、騒  
働のねさしとは成にけり

松森寄合之事

今度御役人方御廻村有り、村々田畑御内糺シ之上、三割五割増

P 7 8

或ハ古田高拾石に冥加永百文ツ、上納可<sub>レ</sub>致段、被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>之

趣を村々聞伝へ、当地改の一件何共難<sub>二</sub>心得<sub>一</sub>、是ハ江戸御老中様方の<sub>二</sub>被仰出<sub>一</sub>にてハ有間敷キ抔と様々にうたがい

を入、閏三月下旬郡中百姓共、小人賀郷と大人賀郷の境上野<sub>うわの</sub>

松森と云所に寄合をぞ始ける、<sub>さて</sub>抔、寄合評定之趣ハ今度

御地改の次第ハ、新開切添畑田成等之事と存、御請印いたし

候処、古田畑にも御高増懸ル様子也、<sub>さ</sub>左候而ハ、<sub>さそうらうて</sub>困窮の百姓

所詮立行成間敷なれハ、御代官所へ再応御願申上、御聞

P 79

濟無<sub>レ</sub>之時ハ、江戸御奉行所へ願上可<sub>レ</sub>申、且又当国御

検地ハ濃州大垣戸田采女正様へ被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、元禄年中戊亥両年

國中御検地相濟、其時の被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>にハ今度御検地御水

帳ハ当国百姓永代の御朱印也、大切に取扱ひ可<sub>レ</sub>申段

被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>候と、一同承知いたし居ル事也、然ハ古田畑御改の一条ハ

甚難<sub>二</sub>心得<sub>一</sub>、是等の始末ハ直ニ大垣へ罷出、御窺ひ申上可<sub>レ</sub>然

抔と種々様々の評定也、斯而上野寄合数日に及び、

次第に大勢にぞ成にける

P 80

#### 諸勸進断之事

俅<sub>さて</sub>、上野会合の上評定しけるハ此度の願容易に可<sub>レ</sub>濟事に

あらず、しかれハ入用金多分差出シ候てハ叶まじ、先百石ニ付

金式分ツ、差出シ可<sub>レ</sub>申、ケ様に物入出来に付てハ困窮の百姓

難儀の上難義なれハ、願相濟迄ハ諸奉加・禰宜・山伏の初穂

瞽女・座頭并乞食・非人等の手の内、且又御寄会金或ハ諸

本山への志等一切差出ス間敷キに相定、寺々或ハそれぞれの

頭の方へ人ヲ以其趣を申伝へける、<sub>こ</sub>爰に大沼村名主久左衛門・町方村

P 81

名主治兵衛ハ、去卯年国分寺寄合の節にも遅参に及び寄合居ける

族あしさまに云なし、既に居室もこわすへきよしを申ける也、

され共毀しにも来らず、事しつまりて後、罷出ける故其時は

御咎メもなかりしなりける、今度も其心得にて触下村々絵図帳面

等に懸り居て遅参に及びけり、寄合の席よりハ度々使来リ、

後ニハ親しき者共罷越すすめける故、無<sub>レ</sub>抛寄合所へ出けるに外ニ

取メリする人も無<sup>レ</sup>之故、兎角する内自然と頭取の振合ニ相成也、  
此者共全く後難之程思ハぬにハあらされ共、当御支配様ヲ深ク

P 8 2

疑ひける謂ならんか、右兩人并漆垣内村名主七郎右衛門・同村百姓徳右衛門  
三福寺村七蔵・半兵衛其外村々名主百姓一同相談決シける趣ハ、当

御役所へ再応御敷ヲ申上御聞濟無<sup>レ</sup>之時ハ、江戸御奉所へ願出可<sup>レ</sup>申、  
(行脱カ)

猶又、大垣表へも御窺ひに罷出可<sup>レ</sup>申ニ相決シける  
(ニカ)

#### 新町川原寄合之事

上野寄合にて相談決シ、連判定之一札願書共印形相濟、四月  
朔日新町川原ニ寄合可<sup>レ</sup>申に定置けれハ、郡中方寄集ル人数  
さなから稲麻竹葦のことし、先川原にて一通リ申談シ直ニ

P 8 3

御役所へ登りける、兼而名主百姓代はかりと極置けれ共、是又大勢

に相成、物騒ケ敷見へにける、猪、重立ける名主共 御役所へ罷出願書  
ものさわがしく

差上げる、其文言ニ曰

乍<sup>レ</sup>恐以<sup>ニ</sup>書附<sup>一</sup>御敷キ奉<sup>ニ</sup>申上<sup>一</sup>候

一、当国之儀往古金森出雲守様御上知以後、御代官伊奈  
半十郎様御支配ニ相成、元禄年中戌亥兩年ニ、濃州大垣城主

戸田采女正様へ御檢地被<sup>ニ</sup> 仰付<sup>一</sup>国中一円御改相濟、出目位付<sup>でめ</sup>  
等御糺之上、御水帳村毎御渡し被<sup>レ</sup>遊、大切ニ所持仕候事、

P 8 4

一、享保年中、長谷川庄五郎様御支配之節方御定免ニ被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>候処、  
御子息長谷川庄五郎様御支配ニ相成、国中一統三分五厘増免被<sup>レ</sup>  
仰付、百姓難義仕候、其後追々御代官様御替リ之度毎、御定免  
御切替毎ニ、御増免被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>候得共、無<sup>ニ</sup>違背<sup>一</sup>御請仕御年貢奉<sup>ニ</sup>  
差上<sup>一</sup>候、左候得ハ、先伊奈半十郎様御支配之時ニくらへ候得者、倍にも  
及候得共、当国之儀ハ四方高山ニ付、雪霜はやくふり、殊に猪・鹿  
猿等諸作をあらし候ニ付、御見立免も得御願不<sup>ニ</sup>申上<sup>一</sup>、此度も  
御定免奉<sup>ニ</sup>願上<sup>一</sup>、忒厘余御増免被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>奉<sup>レ</sup>畏候事

P 8 5

一、此度当国御地改被<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>、江戸表方御奉行様御越被<sup>レ</sup>遊、灘郷  
花里村御繩はしめニ候処、其後御手代地役人方御廻村被<sup>レ</sup>遊候而  
新開切添畑田成等逐一御改被<sup>レ</sup>遊、其上古田畑ニ、三割増五割増

御願可ニ申上一段被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>候処、百姓共ハ新開切添畑田成等の御改と奉<sub>レ</sub>存罷在候ニ付、古田畑ニ御割増之儀ハ御請難ニ申上<sub>一</sub>候事  
一、先年御檢地御奉行様被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>候ハ、此度御改之帳面百姓永々の

御朱印也、大切ニ可相尋<sub>(カ)</sub>之と御申付被<sub>レ</sub>遊、則、祖父親より申伝へ

大切ニ仕候御水帳反古に相成候半哉と奉<sub>レ</sub>存候、依<sub>レ</sub>之、今度

P 8 6

村々御歎奉ニ申上<sub>一</sub>候ハ、仮令御上様方反古ニ被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候共、先規之御水帳御用イ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>下候様、奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候、猶又去辰年御定免増

被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候後<sub>チ</sub>候得者、何卒当時御增高免増之儀ハ御赦免

被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>、百姓相続仕候様、幾重も御慈悲奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候事

右之趣、恐多キ茂不<sub>レ</sub>顧、御歎キ奉<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候、何卒厚キ御慈悲

ヲ以被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>聞召<sub>一</sub>訳、願之通御聞濟被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>候ハ、國中大小之百姓一同難<sub>レ</sub>有仕合奉<sub>レ</sub>存候、以上

安永二巳ノ四月朔日

何郡何村百姓代

同村名主

誰 誰

P 8 7

高山

御役所

右書付御読之上、被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>けるハ、先年の御水帳反古ニ可<sub>レ</sub>成哉

之旨申出<sub>(候カ)</sub>ル 処、先水帳御用イ之所も有へし、御用イ無<sub>レ</sub>之所も

出来すへし、全ク反古に成義ハ有間敷也、又御地改之儀ハ

何程こそつて願候共、被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候御上意趣、黙止候義可<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>

哉、能々相弁へ可<sub>レ</sub>申、勿論<sub>カ</sub>様<sub>カ</sub>に大勢集リ候ハ徒党強訴之

重キ御法度筋、早々引取、御改ヲ請候而可<sub>レ</sub>然と種々御理解有<sub>レ</sub>りけれ共、承引せさるこそうたてけれ、右願書御取上ケ

P 8 8

なけれハ、又新町川原ニ立帰り種々談し合、其後ハ地改御奉行様名当に願書差上けれハ、御奉行水谷祖右衛門殿・同断

瀧又右衛門殿御役所北の白砂しじすにて被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>けるハ今度手前共  
名当にて願書差出しけれ共、此方願筋取扱役義にあらず

とて、願書御下ケ被<sub>レ</sub>成、其上被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>けるハ、近年信州ニ而右  
体願筋の趣ニ付、百姓大勢集リ強訴に及ひ候所、江戸  
表へ被<sub>二</sub>召出<sub>一</sub>御吟味の上、頭取之者御仕置被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、死罪も有り  
流罪もあり、名主百姓夥敷難義に及ひし也、始終見請ル

P 89

所、其方共も甚心得違なり、とくしつまり御改ヲ請て可<sub>レ</sub>然也と  
数々御理害被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>ける也

御添管(簡カ)願并大垣行之事

郡中百姓御代官所へ御歎キ申上、猶又地改御奉行様迄茂願書  
上けれとも、御取上ケ無<sub>レ</sub>之ニ付、最早江戸 御奉行所へ願出ル方  
外なしと御役所ニ御添状被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>候様願上ける所、御評定之上  
被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>けるハ御奉行所へ添状之儀願之通り差出シ可<sub>レ</sub>申也  
尤此一札ニ印形可<sub>レ</sub>致と御読被<sub>レ</sub>聞候文言之趣ハ当国村々之

P 90

者共地改御免之儀奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候処、御聞届ケ無<sub>レ</sub>之段々理害被<sub>二</sub>  
仰聞<sub>一</sub>候得共不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>事 江戸御奉行所迄御歎キ申上度御添簡  
奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候処願之通御添簡被<sub>二</sub>下置<sub>一</sub>難<sub>レ</sub>有奉<sub>レ</sub>存候右之一札双方  
印形可<sub>レ</sub>致シ印形揃ひ候ハ、添簡差出へき段被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>ける

名主共印形差出候(之カ)義如何と存一同印形御断申上ける、其時も  
色々御理解有けれども不<sub>二</sub>聞入<sub>一</sub>門外へハ百姓大勢相詰居て名

主衆其印形ハ相ならぬ也、如何様いかようの事に御用イもはかりかたし

杯などとハめきの、しり傍若無人の振廻ふるま也、重而被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>けるハ其

P 91

方共印形致さねハ添状も差出す事相ならぬ也、此上ハ其方共の  
勝手次第ニ可<sub>レ</sub>致とミなミな座を立たまいけれハ名主共も詮方なく  
しらすを退き又新町川へ寄合ける

評ニ曰此時二百姓共右書付に印形いたし御添簡を以

御奉行所へ罷出ハ願ハ不<sub>レ</sub>叶頭取の者御咎メハ蒙ルとも

公儀の御にくしみハ請問敷ニ疑心のみにこりかたまり

右等の道理の別らさりしハ (かカ) よくも愚昧ぐまいのなせる所歟 か

残念々々

当御役所におゐて最早可<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>手懸りもつき果けれハ、又新町  
P 9 2

川原へ寄合評定いたす趣ハ、此上ハ一日もはやく大垣へ罷越手引を

もとめ百姓存意の次第を御願申上、大垣表にても埒明らちあけ不<sub>レ</sub>申ハ

江戸表江罷越御駕籠訴可<sub>レ</sub>致、たとへ願筋ハ不<sub>レ</sub>叶一命を召るゝ

とも御老中様迄願出候へハ生前未来の本懐也と皆一同ニ申

ける、さて偕大垣発足ハ四月十日頃と定、大垣行人数名主たれたれ

百姓たれたれ、国元にて入用金取立、并書状取かわせの手はづ  
迄もそれぞれに取極メ、皆村々へ退キける

地役人方遠方村々御廻村之事

P 9 3

偕、地役人方遠方入々の村方へ御立越有り、御代官所方被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>ける  
御理害の書付御読被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>聞、猶又、小前之者さわ立不<sub>レ</sub>申様とく  
異理和理被<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>仰ける故、得心の村々も有<sub>レ</sub>之、不呑込の所も  
多かりける、兎角世間の悪評まちまちなる故、人氣も又まちまち  
にて落つかさりける

妹尾順兵衛江戸発足之事

先達而、内改ニ村々へ廻られける御手代地役人方皆々御帰り被<sub>レ</sub>成被<sub>二</sub>仰上<sub>一</sub>けるハ  
私共被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>之趣ヲ以、村々内改の儀申聞案内可<sub>レ</sub>致段、申付之所

P 9 4

村々得心不<sub>レ</sub>致、様々過言等申族、やから数多有<sub>レ</sub>之、此方方申なため漸々  
あまた

案内為<sub>レ</sub>致候振合ニ而御坐候、右体なれハ容易ニ御改も調間敷

哉と奉<sub>レ</sub>存候と所々へ御廻村之衆中皆一様ニ被<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>けれハ、御代官所  
大きに御立腹あり、不屈きの奴原哉、此上ハ片時もはやく江戸

御勘定所へ申達、御威光ヲ以からき目を見せずハ、夢はさめまじと

御手代妹尾順兵衛ニ江戸発足之儀、被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>ける、順兵衛ハ夜を

日について、江戸表へ急かれけるに程なく江戸下谷御屋敷へ到着、

直ニ御奉行所へ罷登り、飛州百姓徒党ヲ企、地改難渋いたし

P 9 5

たる趣、重立ける者共名前等迄、逐一ニ被<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>ける、御奉行所にも  
以之外御憤りにて 公儀之御詫意相背程之不法、言語



同断也、不日ニ嚴敷吟味を糺シ取しつめ可レ申と、即日  
御老中様へ御届ケ有レ之、同様不屈キニ被ニ思召レける趣也、順兵衛ハ  
はや打ヲ以、右之趣ヲ飛州へ申送られける

飛州百姓大垣出訴之事

諸、飛州百姓共、戸田采女正様へ御願可申上と、四月十日ニ国元出立  
昼夜を懸けて急キけるに、同十三日大垣城下ニ参着いたし、御家

P 9 6

惣

中方所々聞合、飛州御檢地奉行、小原仁兵衛殿御屋敷へ立入、  
願書御取次の頼ミける、大勢罷出候てハ不可然とて大沼村名主  
久左衛門・町方村名主次兵衛、其外一兩人付添罷出ける所、仁兵衛殿直と

罷越

御対面あり、被仰けるハ、飛州百姓何の子細にて是迄被召越  
候哉、甚いぶかしと有けれハ、久左衛門・次兵衛頭ヲ下ケ、乍恐是迄推参  
仕まする一条ハ、飛州之儀、先年当御殿様御檢地にて、一国御  
取立被為遊、其時之御檢地惣奉行様か此御家ニ候故、御名を

したひ是迄参上仕候、扱此度、御願之一件ハ当年御勘定 之

(ト)

P 9 7

御奉行所方御地改被仰付、新開切添畑田成等御改被遊、其上  
古田畑ニ三割増或ハ五割増等御高請仕候様、被仰付候ニ付、再応  
御代官様へ御願申上候得共、御聞濟無レ之難渋至極仕候、然ルに祖父  
親方申伝候ハ先年御檢地御水帳被ニ下置候時、此御水帳ハ其方共為メ

可レ致

ニハ御朱印同然也、永々大切ニ所持可レ然と被ニ仰聞候と承候、是  
等之儀を考へ見候得者、再御改之儀ハ有間敷様ニ奉レ存、此段御  
窺ひ申上度罷登り候、何卒御慈悲ヲ以当御殿様へ御披露

奉ニ願上ニまする、猶願書も認持参仕候間、御取次被ニ下置候ハ、難レ有キ  
P 9 8

仕合と一同ニ申上ける、小原氏被ニ聞召レしばらく御思案在テ被レ仰けるハ  
夫ハ其方達の心得違なるへし、其謂ハ飛州御檢地先年此方へ

被ニ仰付候ニも天下の御下知也、今御勘定所方御改も 公儀御上意  
を蒙りての事なるへし、天下の御料地天下方御改ニ、外方いろう

事あるへからず、願之筋有ニおゐてハ早速国へ立帰り御支配御  
代官所へ幾重も可レ被レ願と被ニ仰聞御取用イあらされハ、重て可

ニ申上様もなくいとま申て立さりける、百姓共不ニ得止ニ事又郡奉行  
町奉行御屋敷へ茂立入願けるに、何れも同様の御理解なれハ

P 99

今ハせんかたつき果て、又一所に集リ如何はからひ可<sup>レ</sup>然哉と十方ニ  
くれて居たりける、山口新十郎申けるハ、我先年京都 二条殿ニ

暫ク奉公いたし其後ハ御出入ト成リ、御紋付灯燈(ママ)会符えふも致

ニ頂戴<sup>ニ</sup>今以御家来同然也、今度飛州一件 二条殿へ御願申上てハ

如何あらんやと申ける、大沼村久左衛門・町方村次兵衛ヲ始メ、不承知の族も  
数多有けれ共、外にたよらん方もなけれハ、新十郎・三福寺村半兵衛

花里村庄次郎・下(ママ)ノ切村吉十郎等ハ、京都へ登リ三条宿屋丸屋三郎

兵衛方ニ旅宿して、二条御殿へ立入ける、

P 100

大垣方飛州へ早飛脚并江戸表御届ケ之事

飛州御代官所へ大垣城下方早飛脚を以、被<sup>ニ</sup>仰越<sup>レ</sup>ける趣ハ、飛州  
百姓大勢城下ニ来リ、江戸御奉行所方飛州御地改被<sup>ニ</sup>仰付<sup>レ</sup>、百姓

難渋之趣ヲ申立強テ願候ニ付、段々理害申聞候得共、承知不<sup>レ</sup>仕

今以城下ニ罷在候、早々引取候様御取計ひ可被下候也、依之御

手代青木儀兵衛・佐藤忠蔵大垣城下へ御越あり、飛州

百姓共旅宿へ御立寄再応利害被仰聞ける故、大垣ニ

とどまり居候者あらあら帰村いたしける、猶又江戸表

P 101

松平周防守殿方へ御届ケ有之、周防守大キに御立腹あり

飛州百姓逸々ごちんち召捕候様、笠松御郡代千種清右衛門殿方へ

被仰遣ける故、笠松御役人飛州百姓ヲさかしたまいけれ共

其節ニハ過半帰国致し、或ハ京都へ趣き大垣ニハ耆人も居

さりける

願ニ不加村々之事

奥飛驒寄合之席方ました益田郡村々へ、飛脚ヲ以て申越ける者は

此度御地改之義ニ付、奥郷百姓歎キ願仕度、此節村々寄合

P 102

相談いたし居申候、何方いずかた之百姓も難義之筋ハ同様之事ニ候得者

願筋御同心ニ候ハ、御出会之上万事示合度候と申送りける、依<sup>レ</sup>之

益田郷村寄合相談之趣ハ、御地改之義ハ江戸表方被<sup>ニ</sup>仰出<sup>レ</sup>之事

なれハ、如何様歎キ候<sup>とて</sup>迎、御聞濟ハ有間敷也、猶又、当郷中ハ去年  
出水にて山拔水損場所夥敷出来、地改有<sup>レ</sup>之こそ幸イなれ

御年貢引方等丈夫ニ御願可<sup>ニ</sup>申上<sup>一</sup>と一決して、夫より飛脚ヲ以<sup>それ</sup>  
奥郷へ申越けるハ、益田郷中之儀ハ別ニ存寄候義有<sup>レ</sup>之候得者  
国中一統の御願にハ加リ申間敷段申送りける、且又、灘郷

P103

西ノ一色村ハ、名主喜三郎ヲ始百姓伝三郎、庄介其外重立百姓とも  
一同に存付けるハ、御地改之儀ハ江戸大公儀様方被<sup>ニ</sup>仰出<sup>一</sup>之事なれハ  
如何程郡中歎クとも御聞濟ハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有、兎角願ニ加ル事ハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然  
と各しめし合、郡中の願ニはなれける

古川収納組にて願ニ不<sup>レ</sup>加名主之事

奥飛騨郡中名主百姓一同歎キ願ニ一決しけ<sup>(るカ)</sup>り、然ルに小鷹利郷<sup>(マ)</sup>

谷村名主右衛門四郎、大村名主万介、黒内村名主与兵衛、小嶋郷杉崎村  
名主伊右衛門、右四人之名主共、組下百姓共を呼寄申聞けるハ、今御地改

P104

之儀ニ付て高山収納組ニハ歎キ願の相談も有<sup>レ</sup>之よし、乍<sup>レ</sup>併此御願  
可<sup>レ</sup>叶筋にあらされハ、此度之寄合ニハ決而罷出間敷段ヲ申渡しける、  
組下の者共申けるハ、困窮之百姓共御地改ニ付、新開切添等の  
御改ヲ請、古田畑ニ茂三割五割の増ヲ請候而、可<sup>ニ</sup>立行<sup>一</sup>様なし、ぜひ  
郡中一統ニ御願可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下と頼ミけれ共、元来吞込ぬ事故ニ承引  
セさりける百姓共腹を立テ、ケ様の名主を頼にして居ル内に  
百姓ミなミな退転に及ふへき也、百姓共難渋の筋、御歎キ被<sup>レ</sup>下

間敷ならハ、御水帳<sup>(者カ)</sup>も百姓方へ請取、別ニ名主代相立可<sup>レ</sup>申と御水

P105

帳并村方諸帳面等皆百姓方へ請取、郡中一烈の願ニ加リける

御奉行所方差紙<sup>(到カ)</sup> 至 来之事

四月下旬御勘定所方御差紙<sup>(到カ)</sup> 至 来、江戸公事宿坂野屋平八  
持参いたし名前の村々へ相廻り、奉<sup>ニ</sup>拝見<sup>一</sup>候趣一札ヲ取立帰りける

御刺紙文言<sup>(下)</sup>ニ曰

尋子細有<sup>レ</sup>之間早々可<sup>ニ</sup>罷出<sup>一</sup>者也

安永二巳四月 注<sup>1</sup> 石備後判

大沼村名主 久左衛門  
町方村名主 次兵衛

P106

上岡本村名主	下坪村名主	野首村名主	古川町方村名主代
藤蔵	助右衛門	七左衛門	次右衛門
三福寺村百姓	小屋名村名主	舟津町村名主	新張村名主
七蔵	六右衛門	徳右衛門	伝次郎
山久知村百姓	宗兵衛	以上拾耆人也	

右名前の名主百姓其外付添ニ出府可<sup>やから</sup>致輩、ミナミな旅の用意を

取調<sup>のしと</sup>へける

御召之人々江戸出立之事

今度御刺紙名前拾耆人ハ不<sup>(差)</sup>及<sup>レ</sup>申、付添出府之名主にハ漆垣内

村七郎右衛門、八日町村名主七郎右衛門、坊方村名主太郎兵衛、其外村々名主百姓<sup>12</sup>

(注1) 勘定奉行 石谷<sup>いしがや</sup>備後守清昌(宝曆9年(1759)〜安永8年(1776)在勘定奉行職)

P107

大勢付添、巳五月六日ニ高山出立、関東へおもむきける、但拾耆人御差紙名前之内、三福寺村七蔵、病氣にて同村藤蔵ヲ名代ニ遣ス、古川町村次右衛門、同様病氣ニ付同村佐平次名代ニ出府為<sup>レ</sup>致ける、右高山出立之節者、郡中村々并ニ出府之者之諸親類、或ハ高山町にて重立ける人々、在方にて田畑所持の町人、酒肴等ヲ持皆見送りに出ける、人数夥敷事共也、其節入用金取<sup>ベリ</sup>等に国に残る者共者、下岡本名主平兵衛、町方村名主平七、細越村名主平兵衛、下坪村百姓次左衛門、漆垣内村百姓徳右衛門等高山一ノ町

P108

大坪屋卯右衛門方ニ相詰居けるなり

江戸表<sup>を</sup>被<sup>ニ</sup>仰渡<sup>一</sup>の事

御勘定奉行所<sup>を</sup>当国御役所へ仰渡の次第ハ飛州百姓共徒党強訴におよび、地改難渋致候段、不届き至極ニ被<sup>ニ</sup>思召<sup>一</sup>重立候者、江戸表へ召出シ御吟味有<sup>レ</sup>之也、ケ様之風情御料ハ勿論私領等へ相移り候てハ、世の騒キと成行んも難<sup>レ</sup>計間

其表ニ残り居ける徒党の者共、急度吟味可レ被レ遂、勿論人違、吟味違等不レ苦、手向致ス族有レ之におゐてハ即座殺

P 1 0 9

害におよび候共不レ苦間、嚴重ニ吟味ヲとげ取しつめらるへき段御下知也、依レ之御役所於も御吟味の用意急也

新獄屋并責道具出来之事

飛州願方の百姓共、御吟味可レ被レ遂ニ付てハ牢者等も大勢出来すへしと、古牢の外、式間ニ九尺又六尺四方の獄屋

俄ニ出来、御陣屋ニ而も拷問之道具色々出来、其砌みざり

尾州名古屋、濃州川辺方足輕式拾余人雇ひよせ、近々

御吟味はしまりける御用意とそ

P 1 1 0

徒党之村々御吟味之事

偕さて、灘郷大人賀郷、小人賀郷を始、願方の村々被ニ召出ニ御吟味

之趣ハ今度御勘定所方当国御地改被ニ仰付一、一同承知之

印形差出しおきながら、地改難渋いたし、徒党強訴に及ひ

候村方急度吟味可レ遂段、江戸表方嚴重の被ニ仰渡一也、

いかに愚昧の者なれハとて、是迄理害申聞候ヲも得心

不レ致、大垣城下迄茂願出、同所役人中被ニ申聞一候理害をも不

相用一、数日逗留の上、強訴におよひ、猶又山口村新十郎京都へ

P 1 1 1

上り二条殿江立入、役人中ヲ頼、取拵願首尾宜敷杯与金銀

貪らん為メ申越候を誠ニ聞請、郡中方金銀為ニ差登一候段

重々不届至極也、公儀方被ニ仰出ニ義、二条殿へ願候とて

御取上ケ可レ有様なし、新十郎始メ大沼村久左衛門・町方村治兵衛

頭取いたし郡中をすゝめ強訴におよひ、引続キ村々に頭取

の者共ありて、供々小前をすゝむると見へたり、無レ偽有体可ニ申上うてい

と嚴重ニ被ニ仰渡一ける、就中御上の御目にとまりしもの

村々有レ之、其者共ハ悉牢舎被ニ仰付一、日々被ニ召出ニ角責・天秤

P 1 1 2

責・車責等嚴敷拷門(44)ニ懸り、くるしみさけぶ有様、役人中之

御化(叱カ)の声、あたり四五丁へ響き、さながら地獄のかしやくなりとも

是にハ過きじと恐ろしき、追々郡中被<sub>二</sub>召出<sub>一</sub>嚴重御叱りの上  
御理害被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>ける、依<sub>レ</sub>之村々一同奉<sub>レ</sub>誤候趣口書差上げる  
文言之趣ハ、今度御地改之儀御違背申上候所存、毛頭無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候  
然処、大沼村久左衛門・町方村治兵衛其外頭取之者ニ迷され、重キ御  
法度強訴ニ相成候義共、不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>存候処、御理解之趣ヲ承知仕候而ハ  
千万恐入奉<sub>レ</sub>存候、左候得ハ、御地改之儀ハ何時被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候共、違背仕間  
P 1 1 3

高山町組頭御召出シの事

倍、高山五拾三組頭中 御役所へ被<sub>二</sub>召出<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>之次第ハ  
此度國中御地改ニ付、百姓共申合強訴におよひ候義、江戸  
表方急度吟味ヲ遂ケ可<sub>レ</sub>申段、被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>也、然ルに高山町ハ御陣  
屋付の宿場也、何れの国々にてても、御陣屋付城付等の町場ハ  
P 1 1 4

格別の御取計ひなり、さすれハ町人共も御上へ対シ格別の心得  
可<sub>レ</sub>有道理也、然ルに高山町ハ地方同様心得違いたし百姓共地改  
難渋いたし候根元ハ、町方の者共之内百姓の腰押す者共有<sub>レ</sub>之

方事起ル様子ニ相聞ル也、今、徘徊するの生花するのと言身柄の

者共の申事ハ実<sub>ニ</sub>に聞請ルから、諸人心得違<sub>レ</sub>いたし、騒働の

もといとハなる也、まり、茶の湯、うたひ、浄瑠璃、琴、三味線、遊

芸残ル所もなく、諸道具ハ朱の膳椀、金銀蒔絵の器物、衣類の

奢リハ絹紬を下とする也、是皆御条目に、はつれたる事共也

P 1 1 5

非<sub>ニ</sub>其耳<sub>一</sub>、寺々普請の結構、仏事等の奢り、右体栄耀

おこりに金銀を費ス事は少茂いとわす、今御地改ニ付てハ後の  
程もしらす、立行ぬの困窮のと種々の事を申立難渋いたし

候義、以外の不埒物共也、就中、他国商或ハ駄賃荷物等もち

はこぶ者共、道すからも種々の事を申、人氣じんぎをうこかし在々へまはる

木綿売、茶売の族やから、百姓共の氣に入ぶしに様々の悪評言ふれるによつて、終にハ騒動の根さしと相成也、右体の者共是迄に相知れ候分ハ追々呼出し可<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>吟味<sub>一</sub>也、此上心得違致候におゐてハ

P 1 1 6

町端(マヤ)とても無<sub>二</sub>用捨<sub>一</sub>急度可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>と嚴重被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>ける、組頭一同恐入  
向後不埒不<sub>レ</sub>致様小前へ急度可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>段、一札差上ケ相濟みける

#### 頭人の居宅書物御改之事

高山御役所におゐて御吟味始りける砌みぎり、御手代内山庄介、地役人  
田近孫藏、程為八、上村藤介、大沼村名主久左衛門宅へ御越ありふれ下

村々并ニ家内之者へ被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>けるハ、先達せんだつて而江戸御召シにて罷出候、久左衛門  
はしめ拾壹人の者共、当月十八日御奉行所へ被<sub>二</sub>召出<sub>一</sub>御吟味被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>

候処、新にいはり村伝次郎、船津町村徳右衛門、三福寺村藤藏申上ル趣ハ

P 1 1 7

今度御願に頭取致候ハ、大沼村久左衛門、町方村次兵衛ニ而、其余の者共ハ  
兩人計ひに付て廻りにて候と白状におよび、依<sub>レ</sub>之久左衛門、次兵衛  
嚴重御吟味也、久左衛門申上ル次第ハ、私頭取仕候義にてハ決而無<sub>二</sub>御坐<sub>一</sub>  
其証拠にハ、諸方村々々頼の書状、示合之書物等国元ニ有<sub>レ</sub>之  
是を取よセ御覽被<sub>レ</sub>遊候得者、私共頭人にて無<sub>レ</sub>之段、相しれ可<sub>レ</sub>申旨

を申上ル也、右体うていの書物あらハ、不<sub>二</sub>隠置<sub>一</sub>差出し可<sub>レ</sub>申と被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>ル也  
家内の者は何の心覚へもあらされハ、久左衛門常に取扱帳箱、文  
庫を出しける故、逐一御改メ有けれ共右懸り合の書物ハこれなし

P 1 1 8

依<sub>レ</sub>之立会改見れ共、書物無<sub>レ</sub>之段、一札認、印形注1為<sub>レ</sub>致帰られける

八日町七郎右衛門宅、町方村次兵衛宅へも御手代地役人御越、書物御改

有ける所、久左衛門宅同様の振ふりあ合也

そもそも

抑久左衛門江戸表ニおみて御吟味之節、頭人之由訴人有<sup>レ</sup>之、<sup>こよよ</sup>弥御吟味嚴重也

其時久左衛門御答ニハ、私頭取仕候義全ク無<sup>レ</sup>之、其証拠ニハ国元村々方頼の

<sup>しめしあわせ</sup>

書状、猶又示合之一札有<sup>レ</sup>之、取寄御覽被<sup>レ</sup>遊候へハ、別<sup>り</sup>候趣ヲ申上ケ

ける、此段江戸御奉行所方当御役所へ被<sup>ニ</sup>仰越<sup>一</sup>趣也、依<sup>レ</sup>之、久左衛門宅

其外、重立候名主方へ御糺シ、有<sup>レ</sup>之ける、其時久左衛門弟、高山三ノ町近藤や

勘十郎、久左衛門宅へ欠ケ付、右示合の一札書状等取隠シ候而差上さりける

<sup>(イイ)</sup>

後日に諸人勘十郎心底をヲあやしミ聞<sup>ける</sup>、勘十郎申けるハ、右連判之

P 119

一札差出候ハ、右印形之人数式百余人ミな御吟味者也、悉く

江戸表へ被<sup>ニ</sup>召出<sup>一</sup>候而ハ、国中之費<sup>ついで</sup>幾莫そや、其上兄之罪の軽まん

事も無<sup>ニ</sup>覚束<sup>一</sup>シ、<sup>おぼつか</sup>国中之ため大勢の為メを思ひ取かくしたりと

物語りける、右連印之一札文言左之<sup>さ</sup>ことし

#### 相定申証文之事

一今度当国之儀、為<sup>ニ</sup>地改<sup>一</sup>江戸表方御奉行様方御越

被<sup>レ</sup>遊、古田畑再檢地被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>、余分有<sup>レ</sup>之村方へ三割増五割増

高被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>、先達而段々増免ニ而、大小之百姓<sup>きわめて</sup>極困窮之上、右

P 120

增高被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>候ハ、此後町在人々退転仕様<sup>なる</sup>成被<sup>レ</sup>成方ト相見へ申候

依<sup>レ</sup>之、村々大小之百姓数日相談仕、江戸御公儀様迄御

<sup>なぬし</sup>

願被<sup>レ</sup>下候様、郷々村々名主様方相頼申候ニ付、郷々<sup>あじやく</sup>跡役

各々方相頼、金子入用之節、借用被<sup>レ</sup>成可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候、後ニ至リ

候ハ、人々持高割合之節、急度相済シ、各方差支ニいたす

間敷候、今度之儀ハ、太切成儀ニ御座候得者、金銀之儀ハ差

支致間敷候、且又江戸願之筋本望ニ不<sup>レ</sup>参候共、殿方様

江茂、被<sup>レ</sup>成方之善悪、又ハ恨ケ間敷儀、大小百姓申間敷候

P 121



右之通り、吉城郡大野郡益田郡二郡、不<sub>レ</sub>残寄合相談相定  
申候上ハ、少茂相違無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候、依<sub>レ</sub>之、郡中村方名主百姓代  
判形仕候、為<sub>二</sub>後日之<sub>一</sub>定証文仍而如<sub>レ</sub>件  
安永二年巳四月

益田郡

大野郡

吉城郡

名主百姓代  
式百七人印